



## 「目指すは幸夢員」

## 公務員女子のキャリアデザイン

これまでの働き方を  
ふりかえると

私が市役所に入庁したのは1986年。男女雇用機会均等法が施行された年でした。公務員になったのは、一人っ子でもあり、地元就職したいと思ったからです。当時、田舎には、大卒女子を雇ってくれる民間企業はほとんどありませんでした。また、たとえ就職できたとしても、結婚や出産を機に辞めなければなりません。せっかく大学を出たのだから、仕事は続けたいと思い、地元のみ市役所に勤めることにしました。

入庁して8年間、20代は選挙管理委員会事務局で働きました。正直、選挙の仕事はあまり好きになれず、その頃はセクハラやマタハラもあって、仕事はあまり楽しくありませんでした。「食べるために働いている」感覚だったので、当時の働き方を「ライス(米)ワーク」と呼んでいます。

30代前半は障害福祉の仕事をしました。事務量が多く、昼間は窓口対応に追われ、夜遅くまで残業の毎日。休日もこっそり出勤して残務整理をしていました。30代後半は、職員課に異動し、職員の福利厚生や研修の仕事をしました。どちらの仕事も大変で、夫も協力的ではありませんでしたが、家事との両立に悩み、辞めてしまおうかと思ったこともあります。でも、仕事はやりがいがあり、大好きだったので、ライスから「ライク(好き)ワーク」になりました。

40代になってからは男女共同参画の仕事をしました。そこでは、女性のための再就職支援や起業支援の講座を立ち上げ、多くの受講生に喜んでもらいました。実際に就職や起業をしていきいきしている卒業生を見た時は嬉しくて、ますますやる気が出ました。市民の役に立つ講座を企画するためには自分自身も学ばなければなりません。休日はあちこちの講演会や勉強会に出かけ、



諫早市 健康福祉部 次長

村川 美詠

〔むらかわ・みえ〕1963年長崎県生まれ、1986年諫早市役所入職。著書に『自分もわりもうまくいく！公務員女子のおしごと帳』『すべての働きづらさをふきとばす！公務員女子のおしごと相談室』（学陽書房）がある。

本もたくさん読みました。まさに「ライフワーク」な日々でした。

そして今、50代。管理職になり、チームで仕事をする楽しさを実感しています。もちろん、うまくいくことばかりではありません。でも、数少ない女性管理職のリーダーとして、人や社会を照らす「ライトワーク」な働き方をしたいと思っています。

56歳の時、『公務員女子のおしごと帳』という本を書きました。おかげさまで「元氣が出た」「仕事に前向きになれた」等の感想をたくさんいただきました。以前に比べ、女性公務員の数は増えましたが、管理職はまだ少ないのが現状です。退職まで残り少なくなってきましたが、これからも大事なことを決める場にもっと女性が参画できるように働きかけていきたいと思っています。

ライス→ライク→ライフ→ライトと進化してきた私の働き方ですが、最初からそれを意識していたわけではありません。与えられ



## >>> 私のキャリアデザイン



ホワイトボード・ミーティング®のスキルを活かしてミーティングを実施

た仕事や人との出会いを大切にできたら、こうなったというのが正直なところ。そして退職後の「ラストワーク」は、これまでの経験を活かし、地域の役に立つことができたらいなと考えています。

### 学びは身を助く

私は40代後半に、産業カウンセラーとコーチングの資格を取りました。学ぼうと思ったきっかけは、男女共同参画の仕事をしていた頃、女性相談を担当していたことでした。DV（ドメスティック・バイオレンス）や様々な問題で悩みを抱えた人の話をうまく受け止めて解決につなげたいと思ったのです。それと、ある講座で傾聴を学んだことで、当時反抗期だった娘との対話がうまくいくようになったのも動機になりました。お金も時間も結構かかりましたが、その後、管理職にたつてから、部下への関わりやチームづくりにとでも役立っています。

50代になってからは、ホワイトボード・ミーティング®の認定講師資格を取りました。ホワイトボード・ミーティング®とは、ホワイトボード

に意見やアイデアを集め、参加者の力を活かして効率的、効果的に会議を進めるファシリテーション（活動のプロセスをサポートする）のスキルです。気軽な打合せから困難な課題解決まで、みんなで役割分担しながらゴールに向かうので、メンバーやチームの力が引き出されて元氣になります。

私は、ずっと会議が苦手でした。自分の意見を主張したり、進行したりするのが不得手なのです。「なんとかならないかな」と悩んでいた時に出会ったのがこの手法でした。このスキルを習得したことで、得したことは山ほどあります。特に、課長になってからは課のミーティングで活用し、様々な事務改善で成果を出しました。意見やアイデアの見える化は、メンバー同士のコミュニケーションも促進します。おかげで風通しのよい職場づくりができました。

### 違いは強み

私はプライベートで「諫早もりあげガールズ」という活動をしています。長崎県にある諫早市の魅力発信をする異業種、異年齢の女性のグループです。活動を始めて7年になりますが、きっかけは、「女性目線で観光タクシーのコースをつくりたい」とひらめいたタクシー会社の社長さんに声をかけられたことでした。集められたメンバーは9人。お互い顔は知っているけれど、じっくりと話したことはない人たちでした。

ぎこちなく始まった活動でしたが、一緒にまち歩きをするうちに「もつと諫早を元気にしたい」という思いを共有し、仲間になりました。それから、市の助成を受け、まちの人の意見を聞きながら、商品開発やイベントの企画、キャンペーン活動など「それいいね!」と思ったことを次々と行動に移していきました。

この活動を通して気づいたことは、「違っても強いな」ということでした。メンバーはそれぞれ考え方や持ち味が違います。最初はその違いから「なんで?」とぶつかり合うことも多かったのですが、途中からお互いの得意ワザをかけ合わせると大きな力になることに気づきました。例えば、私は仕事柄、企画書や決算書をつくるのが得意です。「なんでそんなにサクサクできるの?」と言われて、初めてそれが人の役に立つということがわかりました。また、役所の中にいることで、両方の気持ちが変わり、お互いの思いをつなぐ通訳の役割を担うこともできました。

ほかに、グッとくる写真が撮れる人、イベントの司会がうまい人、アイデアが浮かぶ人、コラボ上手な人、発信力がすごい人：お互いができることを持ち寄れば、決して一人ではできない大きなことができるのです。それに気づいてからは、「私はこれやっておくから、それは頼むね」とお互いを信頼し合い、認め合って、楽しく活動を続けることができるようになりました。

諫早もりあげガールズで地元のブランド「いさはや無袋梨」をPR



この活動をするまでの私は、どちらかと言うとなんでも一人でやってしまおうとするタイプで、人に頼むことも苦手でした。でも、それでは自分の考え以上のものは出てこないし、一人でできることも限られてしまいます。この「任せる」ことで、よい結果を生むという経験ができたことは、その後の仕事にとってもいい影響をもたらしたと感じています。

### まずは「不」から考える

不満、不平、不便、不利、不快、不安、不信、不幸…仕事でもプライベートでも、「不」を感じることをとても大事にしています。「不」に気づいたら、それをどう解消するかを考えるのです。

例えば、障害福祉の仕事をしていた時、10年以上続く「ふれあいあいと交流のつどい」というイベントがありました。実際に障害のある人とふれあうことで、市民の障害への意識を深めてもらうことが開催目的です。でも、会場が遠く（不便）、雨天の対応がでず（不可）、限られた人しか参加しておらず（不満）、企画がマンネリ化して（不評）、当初の目的を見失っているかのようでした。

そこで、私はホワイトボード・ミーティング®の手法をつかって、職員や障害福祉事業所の方々とイベントの改善について話をしてみました。最初はみんな不満な様子でしたが、「どうなったらいいと思う？」と質問をしてみると、様々な意見が出てきました。アイデアとアイデアのかけ合わせも生まれました。結果、近くの商店街が会場になり（便利）、アーケードなので雨の心配もなくなり（可能）、たくさんの人に参加してもらえて（満足）、全く新しい企画のイベントに生まれ変わることができました（好評）。当日、障害のある方々が嬉しそうにお客さんとふれあっている姿を見た時は鳥肌が立ちました。

「不」を消す方法はいろいろあります。正面から挑むのもよし、人の手を借りて乗り越えるのもあります。ときには逃げるという手もあるかもしれません。「不」が一つ減ると、気持ちが一番楽になります。

長い公務員生活をふりかえってみると、「不」をひっくりかえして「快」に変えることは進歩することなのだとわかります。例えば、忙しい職場で働いた時は苦しかったけれど、仕事をさばく段取り力がつきました。泣きたくなるような窓口対応のおかげで、対人力がアップしました。子育てで悩んだ日々が人を思いやる気持ちを育ててくれました。なので「不」を感じたら、「未来の自分を楽にするための修行」だと思つて、「不」を消す方法を考えるようにしています。

### 「気づいた人には責任がある」

同じように「気づいた人には責任がある」という言葉が好きです。意味は、ある問題や課題に気づくのは、それを解決する力があるからであつて、気づいたのにそれを放つておくのは無責任だということです。気づいたら損とも思える言葉ですが、何かに気づいたら、「それは誰のせいなのか」と他責で考えるのではなく、「今から自分に何ができるだろう？」と自責で考える。そうすることで道は開けていきます。

諫早もりあげガールズの活動もそこから始まりました。諫早市は観光資源が少なく、市民にも「諫早は何もない」と言われることがよくあります。私も以前はそう思っていました。でも、実際にまちを歩いてみると、地域のあちこちに美味しいものや美しい景色、自慢できるものがたくさんあることがわかりました。それをPRできていない行政が悪いとか、商店街がダメだと他責で考えるのではなく、「自分たちにできることは何だろう」と考えようとしたのが諫早もりあげガールズなのです。

初年度は市から補助金をいただきましたが、その後は、自分たちの会費や自作のポストカードの売上金を活動費にあてています。ホームページやSNSでの魅力発信、ポスター展、お土産やカフェメニューの開発など、自分たちができることを、女性目線と遊び



## >>> 私のキャリアデザイン



諫早もりあげガールズ  
結成5周年のイベントにて

心を大事にしながらかつ続けているのです。

### 管理職は面白い

男女雇用機会均等法第一世代の私たちは、若い頃から「これからは女性も管理職になる時代だ」と言われてきました。ですが、当時、女性に与えられる仕事は補助的なものが多く、スキルが積みあがっていかないイメージを持っていました。実際に庶務的な仕事の経験が少なく、いきなり管理職にさせられて辞めてしまった方もいました。私も、係長、課長補佐と昇任していくにつれ、正直「課長になったら大変そう」「私にできるかな」という不安を感じていました。

でも、実際に課長になってみると「役職が人をつくる」とはよく言ったもので、それなりにできるようになりました。課長になると入ってくる情報も増え、判断もしやすくなります。外部との関わり方も変わってくるので話を進めやすくなります。

「役職が上がると見える景色が変わる」とはこういうことかと思いました。

それと案外、人を動かして仕事をするというのは面白いのです。自分では思いつかないことや、一人ではできないことも、チームならできます。そのためにメンバーの持ち味を合わせたり、しくみをつくったりして、それがうま

くいくとガッツポーズです。

私は管理職になる前、職場の対話が少ないこと、それによって調整がうまくいかなかったり、お互いが助け合えなかったりすることがストレスでした。いつか、自分が課長になったら、コミュニケーションが豊かな職場をつくりたいと思っていました。課長になってからは、「ザツソウ（雑談と相談）」と「シユンギク（その人の今、旬を聴く）」をベースにしたチームづくりをしました。例えば「来週のこの日は休みますのでよろしく」や「今月はこの業務で忙しいので手伝ってください」が言いやすい雰囲気づくりです。実際にやってみると職場は明るくなり、助け合いが増え、残業も減りました。それはリーダーでなければできないことだと思います。

### ロールモデルではなく ロールサンプル

最近、すごく腹落ちした言葉は「ロールサンプル」です。私たちの世代には「後に続く女性たちのロールモデルにならなくては」みたいな思い込みがありました。「女だからできないと思われたくない」という変な意地もありました。少々力が入りすぎていたと思います。中には「結婚して、子どもを育て、仕事も頑張る」みたいな理想像を押し付けられて、困惑したり、怒りを覚えたり、落ち込んでしまった人もいたかもしれません。

仕事や家族、ライフスタイルに対する価値観は多様です。家族を優先したい人もいれば、仕事が生きていける人もいます。実家のサポートを受けられる人もいれば、シングルマザーの人もいます。ロールモデルは見つからなくて当たり前だと思うのです。それよりは、サンプルをたくさん知って、仕事の仕方はあの人を見習おう、人間関係構築力はこの人から学ぼう、気持ちの切り替えのコツはあの人に聴こう…とそれぞれの良いところを吸収すればいいと思うのです。

今年の5月から次長という役職になり、さらに見える景色が変わってきました。課長とは違う仕事の面白さも感じています。定年退職まであと3年。現職の間は、ライトワークを続けながら、後輩のためにいいサンプルになればいいなと思っています。人生100年時代、定年退職後のラストワークは結構長めです。なるべく長く元気でいられるように、まずはホワイトボード・ミーティング®のスキルを活かして、地域にファシリテーターを増やす活動したいと考えています。もしかしたら、カウンセラーやコーチングの資格を活かした仕事もできるかもしれません。家に本がたくさんあるので、ブックカフェなどの地域のたまり場をつくりたいという夢もあります。できれば公務員時代の経験（福祉や社会教育、男女共同参画、人材育成）を活かして、地域を元気にする幸夢員になりたいと思っています。